幼児の「誤り」を観て斯（ここ）に普遍文法を知る*

村杉　恵子

1. はじめに

生成文法理論研究の中心的課題は，自然言語を生得的に規定する普遍文法の体系と言語獲得のメカニズムについて，仮説を立て，検証し，理論的意義を明らかにすることにある．幼児は家族や保育士等と接触し，当該言語の入力をもとに基本的な母語体系を獲得する．与えられる入力には個人差もあり，質的にも量的にも不十分であるにもかかわらず，生後わずか数年で個人差のない等質の文法に至る．

すでに母語の基本的な文法体系をもつと考えられる3歳の頃の幼児も，実際は（1）に示すように，当該の言語に関する知識をすべて獲得しているわけではない．たとえば，どの語がどの範疇に属するのかについての知識，語彙や慣用句に関する知識，複合述語文内の small *v* などの機能範疇の形態の音声化には時間がかかる．3歳児の産出する「誤用」は，人が時をかけて獲得する部分についてのヒントを与えうる．[1]

（1）a. *ばっかりだねえ（（眼前に）同じもの（花）がたくさんあるね）（3;5）

* 本稿は，「原理とパラメター理論」に基づく拙論の輯の中から，初期の論文と最近の論文をとりあげつつ言語獲得の実証的研究から言語理論に与えうる示唆について，二節構成で概観するものである．津田塾大学大学院の演習において Chomsky（1981）を教科書とした千葉修司先生，言語理論をそれぞれの分野からご教授くださった天満美智子先生，中尾俊夫先生をはじめとした諸先生方，そして大学院での活動を通して出会った方々に，この場をお借りして深く感謝する．

[1] この言語獲得の記述は南山大学大学院人間文化研究科言語科学専攻博士後期課程に在学中の村井（中谷）友美氏の縦断的観察記録の一部である．

b. *待ち切れて待ってたんだよ（とても長い時間待っていたよ）（3;0）

c. それ，お口に*入れさせて．（それ，お口に入れて）（3:4）

（1）は，一方で語順，動詞と時制の併合，埋め込み，格付与などに関する基本的な文法が既に3歳の時点で備わっていることも示唆している．幼児は自ら創造的に文や語を生成し，母語に不必要な特性を捨てつつ，自らが生まれつき与えられた言語獲得装置に従って，誰からも直接的な言語教育を受けることもなく，わずか数年で母語の文法体系を獲得する．では，普遍文法のいかなる制限の範囲で幼児は創造的に文を生成し，またその範囲はどのように定められているのか．Chomsky（1981）は，文法体系は，普遍文法の一部として生物学的に規定された「すべての言語に共通する原理」と「言語間の違い（言語の多様性）を制限するパラメター」から成ると考える．本稿は「原理とパラメターの理論」が幼児言語の事実と言語の多様性をいかに説明しうるのかについて概観する．

2. 幼児の「正用」からみる普遍文法の生得性

Chomsky（2010）は，北京で行われた第8回 GLOW in Asia において，生成文法理論の発展の過程で提案された普遍文法の性質の代表的な例のひとつとして，構造依存性を挙げている．自然言語に共通する「構造依存性」とは，言語の文法操作は抽象的な句構造に基づいて定義され，文法操作は構造に依存するという特性である．[2] たとえば，英語の Yes/No 疑問文は，（2）に示すように主語と助動詞的要素が倒置することによって生成されるが，主語と助動詞的な要素がどのような規則に基づいて倒置するのかについては，（3）の仮説 I に示す「構造に依存しない規則」と，仮説 II に示す「構造に依存した規則」の両方の可能性が，論理的には可能である．

[2] 本節は，津田塾大学において大津由紀雄先生の授業において紹介された Crain and Nakayama（1986）の草稿に対する追論として，一年半にわたり U.S. Embassy Nursery School ならびに Mrs. Wolf のご家族のご協力を得て実験を行い，千葉修司先生，大津由紀雄先生，井上和子先生，天満美智子先生の助言を得て執筆し，千葉修司先生の演習論文として提出した一部である．

(2) a. The boy is tall.
b. Is the boy tall?

(3) 仮説 I: 1番目の助動詞的要素 (is) を文頭に移動せよ.
仮説 II: 主節の主語の直後の助動詞的要素 (is) を文頭に移動せよ.

仮説 I は，直線的順序に基づいた「構造に依存しない規則」である．それに対して，仮説 II は，「直後」という線的順序に加えて「主節」の「主語」といった抽象的な句構造に基づいて定義される概念を用いた「構造に依存した規則」である．(2) のような単文に関する限りは，いずれの仮説も文法的な Yes-No 疑問文が生成し，どちらが自然言語の文法を説明しうるものであるかは検証されえない．

しかし (4) のような文の構造に Yes-No 疑問の操作が適用された場合には，(5) と (6) の対比から明らかなように，二つの仮説はまったく異なる出力をもたらす．

(4) [The girl who is tall] is pretty.
(5) *Is [the girl who ϕ tall] is pretty? (仮説 I の適用された文)
(6) Is [the girl who is tall] ϕ pretty? (仮説 II の適用された文)

仮説 I に基づけば，「線的に一番はじめの助動詞的要素」が文頭に移動することによって (5) が得られるが，英語を母語とする話者は，みな一様に (5) は非文法的であると判断する．一方，仮説 II に基づけば，「主節の主語の直後の助動詞的要素」が文頭に移動し，(6) に示すような文が生成される．この文は，英語を母語とする話者がみな文法的であると等質に判断する文である．よって仮説 II が，人間に与えられた無意識の文法能力を説明する妥当な仮説であることがわかる．

もし構造依存性という性質が普遍文法の一部であり，人間に生得的に与えられている知識なのであれば，幼児もまた，一見すると複雑に見える仮説 II を（無意識の知識として）知っており，仮説 I のような構造に依存しない操作を用いて疑問文を生成しない可能性が予測される．すなわち，(4) のような複合名詞句を含んだ平叙文の構造と，(2) のような単文における Yes-No 疑問文の操作が獲得されるやいなや，幼児は仮説 II に従って (6) のような Yes-No 疑問文を大人と同様に生成することができると予測される．

Crain and Nakayama (1986) は構造依存性の生得性に関する実験的研究を，3歳から5歳の幼児30名を対象に行っている．幼児に複合名詞句を含む (4) のような平序文を提示し，それを疑問文にして産出させるようなコンテクストをパペットを用いて実験の場で示し，誘導して疑問文の産出を引き出す実験（産出誘導 (the elicited production)）をおこない，その結果，多くの幼児が (6) のように大人と同じように反応することを報告している．また幼児の産出する疑問文の中には大人とは異なる文もあるが，仮説 I のような「構造に依存しない規則」に基づいて生成されたと考えられる非文はないと報告している．「大人とは異なる」文は，以下の三種のパタンに示されるようなものであるが，(9) のような例は観察されなかったのである．

(7) Is [the boy who is being kissed by his mother] is happy?
(8) Is [the boy that is watching Mickey Mouse], is he happy?
(9) Is [the boy that ϕ watching Mickey Mouse] is happy?

(7) は助動詞的要素 (is) が余剰に付加されている例であり，(8) は関係節を含む名詞句の後で，(主) 文が再構成化された例である．

村杉 (1985) は，以上の背景を紹介した上で Crain and Nakayama (1986) の草稿において導入された実験では，助動詞要素が be 動詞に限られているがために，どの位置の動詞要素がどのように操作されているかが見えにくいことに着目し，新たなテスト文として be 動詞以外の助動詞 (例: can) を用いた (10) のような文をテスト文とした実験的研究をおこなっている．村杉 (1985) の仮説としては，幼児が仮説 I に基づいて疑問文を生成するとすれば「線的に一番はじめの助動詞的要素」である can が文頭に移動することにより (11) のような非文法的な文が得られるが，もし，幼児が構造に依存した仮説 II に基づいて疑問文を生成するとすれば，「主節の主語の直後の助動詞的要素」が文頭に移動し，(12) に示すような文法的な文が生成される．ここで予測されるのは，構造依存性の特性は普遍文法の一部であり，幼児は (11) のような疑問文は産出しないというものである．被験者は日本大使館にあるナーサリースクールの幼児に Mrs. Wolf のご子息を加えた3歳から5歳までの英語を母語とする幼児13名を対象としている．

(10) [The boy who can sing] is happy.
(11) *Can [the boy who ϕ sing] is pretty? (仮説 I が適用された文)
(12) Is [the boy who can sing] ϕ happy? (仮説 II が適用された文)

この実験的研究において，村杉 (1985) は，Crain and Nakayama (1986) の草稿と同様に産出誘導 (the elicited production) を用い，複合名詞句を含む (10) のような平叙文を提示し，幼児にそれを疑問文にするようなコンテクストを与え，誘導して産出させた結果，予測どおり (12) のタイプの疑問文の産出が多く，(11) のようなタイプの文の産出はみとめられなかったと報告している．また，幼児の疑問文の中には大人のものとは異なる例も観察されたが，これらの文は，興味深いことに Crain and Nakayama (1986) の観察と同様に，(13 (Cf. 7)) のように助動詞的要素 (is) が余剰に付加されているか，(14 (Cf. 8)) のように関係節を含む名詞句の後で文が再構成化された場合か，(15 (Cf. 9)) のように主節の助動詞的要素 (is) がコピーされ，元位置にも同じ要素が残った場合かのいずれかであった．

(13) Is [the boy that can count] can sing? (4;2)
(14) a. Is [the boy that can sing], is he happy? (4;2)
b. Can [the frog which is sleepy], can it sing? (4;3)
(15) Is [the monkey that can run] is hungry? (4;6)

村杉 (1985) は，異なる被験者を対象とした上記の実験的研究においても，仮説 I の「構造に依存しない規則」を試す段階があると仮定すると予測されうる疑問文が産出されなかった事実は，構造依存性が普遍文法の特性の一部であることを示唆すると考察している．

ここで興味深いのは，(13) のような誤用である．平叙文にある二つの助動詞的要素は助動詞 can のみであるのにもかかわらず，文頭には (どこから来たのかわからない) 助動詞 is が付加されているのである．(13) のような例について村杉 (1985) は，この段階の英語を母語とする子どもは語順のパラメターは獲得しているものの，Yes-No 疑問文を移動による操作ではなく，日本語タイプの (「か」のような) 疑問詞を標示する操作を試している段階にあり，また範疇の音声的具現化において，英語では is は be 動詞のデフォルトの形式である可能性を指摘している．

四半世紀後の今，この推論を再考するにあたり，実際は，これらの誤用を産出している幼児の年齢が4歳を超えていることから，このときの英語を母語とする被験者が，母語の疑問文を生成できず，他の言語の疑問文の生成に関するパラメター値を試しているという可能性は考えにくい．(13) の誤用そのものは，おそらく運用上の誤用であろう．

しかし，文法獲得の中間段階で生成した誤用がいったん終息し当該の文法特性が「獲得された」あとも，幼児は緊張する場面 (たとえば実験の場) などにおいて，言語獲得途上で見せた「誤用」と同様の誤用を，あたかも蜃気楼のように，運用レベルにおいてあらわし続けることがある．Crain and Nakayama (1986) で観察された (7) と同じ「誤用」のパタンが，テスト文に be 動詞以外の助動詞を用いることでより浮き彫りになった (13) のタイプの誤用は，文法獲得の中間段階で母語とは異なる (普遍文法によって制限された範囲の) パラメターの値をあてはめた結果生ずる誤用を，幼児が再度3歳を過ぎても運用上であらわす例ではないだろうか．

疑問文は文の端をなんらかの操作によりマークすることで生成される．(13) は英語を母語とする幼児が疑問文を移動によって生成する操作を獲得する前に，日本語のような疑問詞標示のような操作を試す段階があることを示すのだろう．構造依存性の原理の生得性を調査する途上で観察された幼児の「誤用」は，疑問文生成の操作には「文 (頭) の端への移動」を伴う操作と，「文 (末) の端での (疑問詞の) 標示」を伴う操作という，少なくとも二種類のオプションが自然言語に実在する可能性を示唆するのではなかろうか．そして後者の日本語タイプの疑問詞標示のオプションは，空主語・目的語を許し，主要部が後ろに位置づけられる日本語の特徴とも関連するのであろう．英語を母語とする幼児が疑問文を生成する際に日本語タイプの操作を試すとすれば，幼児の「誤用」もまた，普遍文法の制限の中で説明されうることになろう．

3. 幼児の「誤用」からみる普遍文法の生得性

生成文法理論の発展の中で，言語獲得研究においても，言語が学習や経験，構文パタンの推論のみにより習得されるのではないことを示すいくつかの研究が提言されている．Chomsky (1981) の提案した「原理とパラメター理

論」を背景に幼児の「誤用」を詳細に研究すると，幼児は親も直接教えることもないのに，自らの普遍文法に基づいて，母語にないパラメター値を自発的に試す段階があり，それが母語体系では「誤用」となる場合が少なくない．その誤用は単なる「間違え」ではなく，自然言語に存在する文法の範囲内で制限されうる場合もありうる．

幼児の「誤用」として言語獲得理論において広く研究されてきた現象の一つに，主節不定詞（Root Infinitives）現象がある．本節では，多くの言語において初期段階に観察される動詞の「誤用」の示唆するところについて概観する．[3]

主節不定詞とは，1歳後半から2歳中頃の幼児が，大人の文法では不定詞を用いることが許されない主節内で，（随意的に）不定詞を産出する現象である（Wexler (1994)，Rizzi (1993/1994)，Hoekstra and Hyams (1998) 等）．この現象は，ドイツ語やオランダ語をはじめ，ヨーロッパの言語で多く観察されているが，英語においても同年齢期において（16）に示すように，主文の動詞が不定詞ではなく，裸動詞（bare verb）であらわれることがよく知られている．

（16）a. Eve sit floor (1;7)
b. He bite me (2;9)
c. Horse go (2;3)

興味深いことに，これらの主節不定詞現象にはいくつか共通する特徴がある．主節不定詞は要求や願望などをわらわすコンテクスト（Modal Context）においてあらわれることが多く（Modal Reference Effects），動詞が時制（あるいは一致）を欠いた不定詞形あるいは「原形」（裸動詞）の形式で産出される．また，同時期には幼児の「文」には空主語が多くあらわれ，補文標識

[3] 本節で概観する主節不定詞現象についての詳細は，南山大学言語学研究センターのホームページにも掲載されている Murasugi and Fuji (2009)，Murasugi and Watanabe (2009)，Murasugi, Nakatani and Fuji (2010)，Sawada, Murasugi and Fuji (2010)，Sawada and Murasugi (2010)，Murasugi and Nakatani (2010) 等を参照されたい．これらの研究は南山大学大学院人間文化研究科言語科学専攻・言語学研究センターの活動と支援の賜物である．ここに，斎藤衛氏，Luigi Rizzi 氏，Amritavalli 氏，Jayaseelan 氏，杉崎鉱司氏，多田浩章氏をはじめ，院生ならびにセンター員等の関係者各位に深く感謝する．

（Complementizer）に関連する要素はあらわれず，また文の主語名詞句が，主格ではなく，属格や与格，あるいは奪格などの当該の大人の文法とは異なる「誤った」格に伴われてあらわれることがある．

一方で，主節不定詞現象についての研究史において，すべての言語に主節不定詞現象が観察されるわけではないことも指摘されている．空主語を許さない英語のような言語においては主節不定詞現象が存在するが，空主語を許すイタリア語のような言語には主節不定詞現象はみられないと議論する論文が数多く発表され，当該の言語が空主語言語か否かが，主節不定詞の有無と強い相関関係をもつとする提案が受け入れられてきた（Guasti (1993/1994) 等）．日本語もその例外ではなく，日本語のように空主語を許す言語においては「主節不定詞現象」はみられないとする仮説（Sano (1995) 等）も提案されている．

このような提案に対して，Murasugi (2010) では，すべての言語の初期の言語獲得の段階には，いわゆる不定詞形ではなくとも時制（素性）を欠く「主節不定詞」現象に相当する現象がみられ，当該の言語が空主語言語か否かが，その言語の主節不定詞現象の有無とは直接的な相関関係をもつことはないと提案している．日本語獲得においても，抽象的な意味で「主節不定詞現象」に相当する現象は存在し，さらに日本語という膠着語であり格標示の豊かな言語の獲得を詳細に検討すると，「主節不定詞」と称される現象は，独立した二層の時制（素性）の問題と関わることがわかる．一層は動詞と屈折の併合に伴う動詞の形態の獲得であり，もう一層は主語への主格付与の獲得である．併合のできないとき，幼児は一致や時制を欠く動詞形式を産出する．これは動詞形態の問題である．さらに幼児の格付与に関する時制素性指定が大人のそれと異なるとき，大人の文法では許されない格が主語に付与される．二層は独立した現象であるがいずれも時制句の主要部の特性に関するパラメターの設定に関わる．幼児の「主節不定詞現象」とは「時制のない（または時制素性の未指定な）」段階の現象を指すと考えられるのである．

日本語の「主節不定詞」の「一層目」の段階は，1歳代という早期にあらわれる．この段階では，日本語においても動詞が時制などの一致をあらわす形態を欠き，時制との併合ができず，動詞の形式はいわゆる過去形の形式の「た形」であらわれることが多い（Murasugi and Fuji (2009)，Murasugi, Nakatani and Fuji (2010) 等）．

たとえば野地コーパスにまとめられた日本語を母語とする幼児スミハレの自然発話を詳細に検討すると，1歳6ヶ月から1歳8ヶ月頃までは，ほぼ全ての動詞が「た形」であらわれており，(17) のように意志や要求をあらわすのに用いる例や，(18) のように結果相や進行相をあらわす例が観察されている．

(17) a.　あっち　あっち　あっち　いた (1;6)　(あっちに行って/行け)
　　b.　ちー　した (1;7)　(ちー (おしっこ) したい)
(18) a.　ばば　ついた (1;6)　(ばば (糸くず) が (指に) ついている)
　　b.　ちーした (1;7)　((けいこちゃんが) ちー (おしっこ) している)

この時期には格助詞や動詞・形容詞の時制の屈折，補文標識に関する要素も観察されず，時制の未指定な「た」形が発話者の要求や意志をあらわすコンテクストで用いられる．すなわち，「Modal Reference Effects」が日本語においてもみとめられるなどの点において他言語における「主節不定詞」時期の特徴と性質を一にする．

大人の文法において，この「た形」は，実際は，過去形・完了形のみならず「(さっさと) 帰った！　帰った！」といった命令形や，非現実・未然 (「もしも私が家を建てたなら」，あるいは出来事の結果 (「小さく切った大根」) といった「不定形」あるいは「アスペクト」の形式としての形態も兼ねる．幼児は，時制 (素性) の「ない (未指定な)」段階で，大人の文法においても可能な「不定詞」としての「動詞の語幹＋た」の形式を，他の形態の代用形として用いていると考えられる．

さらに Murasugi, Nakatani and Fuji (2010) などの対照言語学的調査によると，いわゆる「主節不定詞現象」の動詞の形態は，世界の言語を二分化する．不定詞 (ドイツ語，オランダ語，フランス語等) の場合もあれば，裸動詞 (英語，スワヒリ語等) の場合もあれば，動詞の語幹にデフォルトの形態が代用形として付いた形式であらわれる場合 (日本語，韓国語，トルコ語，ルーマニア語，アラビア語，ギリシャ語等) もある．その言語獲得にみられる言語間の相違は，当該の大人の文法において，動詞の語幹がそれ自体独立した形態として成立しうるか否かの違い (Stem Parameter) と関係する．語幹がそれ自体では形態的に成り立たない [－stem] のパラメター値を選ぶ言語を母語とする幼児は，最初の動詞として，動詞の語幹に (当該の大人の文法で

の) デフォルトの形態を代用形として付いた形式を産出する．幼児はわずか1歳という段階で母語の動詞形態の体系の特性を反映した不定動詞の形式を選択するのである．Murasugi (2010) は，屈折の豊かな言語の主節不定詞が，そうでない言語 (たとえば英語) よりも早期にあらわれる事実を示した上で，Wexler (1998) の提案する Very Early Parameter Setting (VEPS) の一部には，語順や空主語に関するパラメター以外に Stem Parameter も含まれ，これらの値は非常に早く設定されると提案している．

さらに「時制のない (素性の未指定な)」段階は，項の整う文が産出される2歳頃にも続き，時制句の主要部 (の素性) は，主語名詞句に対する格付与において，当該の大人の文法とは異なる性質を示す．「主節不定詞現象」がヨーロッパ諸語を母語とする2歳ごろの幼児に頻繁に観察される頃，幼児は，主語名詞句を主格のみならず，随意的に属格あるいは奪格で格標示する「誤用」を産出する．その時期は，多くの言語で主節不定詞動詞と同時期に主語の格が (たとえば *My do it*, **Me want it* など)「誤って」あらわれる時期とほぼ一致する．(19) は日本語を母語とする2歳児の発話例である．

(19) a.　もこちゃん　*のぎゅうにゅう*のほしいだってさ
　　(もこちゃんが牛乳が欲しいんだってさ)　(2;0)
　　b.　わたし　*にかたじゅけるから (わたしが片付けるから)　(2;0)

この段階では，動詞は時制に関して「活用」し，補文標識に関する要素があらわれはじめる．幼児がなぜこの種の格の「誤用」を産出するのか，そしてどのように大人の文法に至るのかについては，紙面の制限により注3に示した論文を参照されたいが，最後に幼児に広く観察される「主節不定詞現象」の言語理論に対して示唆するところに触れておこう．

仮に「主節不定詞」の現象が，本論で述べるように幼児の文法に時制が「ない (未指定な)」段階を示すとしよう．文法獲得の中間段階にみられる「誤用」が可能な自然言語の範囲内で許される値を示すならば，自然言語の中にも「主節不定詞」現象が示すような時制のない (未指定な) 言語が実在しうることが予測される．そのような自然言語は実在するのであろうか．

はたして，インドに実存するドラビディアン諸語の一部 (たとえば Malayalam 語や Kannada 語) においては，主格主語以外の主語，すなわち主文の主語として主格以外の属格主語や奪格主語主文において許されるのであ

る．これらの言語の特徴として，Amritavalli and Jayaseelan (2005) は以下のように述べている．

(20) The clausal structure does not project Tense Phrase in Dravidian languages, and 'tense' morphology that appears on verb on verbs is non-finite and labeled aspect. (Amritavalli and Jayaseelan (2005))

「主節不定詞」現象は世界の多くの幼児言語に共通にみられる誤用である．そしてそれは同時に，おそらくドラビデイアン諸言語の大人の文法でもある (Murasugi (2010))．すなわち「主節不定詞現象」あるいはそれに相当する段階にある世界の幼児は，その時，ドラビデイアン言語の時制に関するパラメター値を試している段階にある可能性がある．

4. 結びにかえて

世界の言語は，共通する特性をもつにもかかわらず，まったく異なるようにも見える．言語獲得研究においては，普遍文法の特性を早期から獲得されていることが示される一方で，幼児の文法的な「誤り」は，普遍文法の制限の範囲の中で起こりうることも明らかにされつつある．

幼児は無意識に普遍文法の道を辿る．幼児が，親も直接教えることもないのに，自らに生まれつき与えられた普遍文法に基づいて，母語とは異なる自然言語に許された文法値を試す段階があるとすれば，それは言語は学習や経験，構文パタンの推論のみにより習得されるのではないことを強く示唆することになろう．この可能性が，今も一歩一歩，証明されつつある．

参考文献

Amritavalli, R. and Jayaseelan, K. A. (2005) "Finiteness and Negation in Dravidian," *The Oxford Handbook of Comparative Syntax*, ed. by G. Cinque and R. S. Kayne, 178–220, Oxford University Press, Oxford.

Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.

Chomsky, Noam (2010) "Poverty of Stimulus: Unfinished Business," Talk presented at Glow in Asia 8, Beijing Language and Culture University, Biejing, August 12th, 2010.

Crain, Stephen and Mincharu Nakayama (1986) "Structure Dependece in Grammar Formation," *Language* 63, 552–553.

Guasti, Maria Teresa (1993/1994) "Verb Syntax in Italian Child Grammar: Finite and Non-finite Forms," *Language Acquisition* 3, 1–40.

Hoekstra, Teun and Nina Hyams (1998) "Aspects of Root Infinitives," *Lingua* 106, 91–112.

村杉恵子 (1985)「文法獲得における構造依存性」ms., 津田塾大学大学院.

Murasugi, Keiko (2010) "The Linguistic Constellations: Relating Acquisition Phenomema with Parameter Setting," Paper presented at Glow in Asia 8, Beijing Language and Culture University, Biejing, August 14th, 2010.

Murasugi, Keiko and Chisato Fuji (2009) "Root Infinitives in Japanese and the Late Acquisition of Head-Movement," *BUCLD 33 Proceedings Supplement*, Cascadilla Press, Somerville, MA.

Murasugi, Keiko and Tomomi Nakatani (2010) "Three Types of 'Root Infinitives: Theoretical Implications from Child Japanese," Paper presented at 20th Japanese/Korean Linguistics Conference (JK 20), University of Oxford, Oxford, England.

Murasugi, Keiko, Tomomi Nakatani and Chisato Fuji (2010) "The Roots of the Root Infinitives," *BUCLD 34 Proceedings Supplement*, Cascadilla Press, Somerville, MA.

Murasugi, Keiko and Eriko Watanabe (2009) "Case Errors in Child Japanese and the Implications for the Syntactic Theory," *Proceedings of the 3rd Conference on Generative Approaches to Language Acquisition North America (GALANA 3)*, 153–164.

Sano, Tetsuya (1995) *Roots in Language Acquisition: A Comparative Study of Japanese and European Languages*, Doctoral dissertation, UCLA.

Sawada, Naoko and Keiko Murasugi (2010) "A Cross-Linguistic Approach to the 'Erroneous' Genitive Subjects: Underspecification of Tense in Child Grammar Revisited," Paper presented at 4th Generative Approach to Language Acquisition in North America (GALANA 4), University of Toronto, Toronto, Canada.

Sawada, Naoko, Keiko Murasugi and Chisato Fuji (2010) "A Theoretical Account for the 'Erroneous' Genitive Subjects in Child Japanese and the Underspecification of Tense," *BUCLD 34 Proceedings Supplement*, Cascadilla Press, Somerville, MA.

Rizzi, Luigi (1993/1994) "Some Notes on Linguistic Theory and Language Development: The Case of Root Infinitives," *Language Acquisition* 3, 371-393.

Wexler, Kenneth (1994) "Optional Infinitives, Head Movement, and Economy of Derivation," *Verb Movement*, ed. by N. Hornstein and D. Lightfoot, 305-350, Cambridge University Press, Cambridge.

Wexler, Kenneth (1998) "Very Early Parameter Setting and the Unique Checking Constraint: A New Explanation of the Optional Infinitive Stage." *Lingua* 106, 23-27.

A CASE STUDY OF THE ACQUISITION OF THE NEGATIVE EXPRESSION: X *TO CHIGAU*

Mihoko Kubota

1. Introduction

This is a developmental case study of a young child's use of the Japanese negative expression "X *to chigau*," which literally means '(something or someone) differs from X,' through the comparison with his father's use of it. It is a denial structure where X usually has Noun or Adjectival Verb in the bare form, while the embedded structure needs to be nominalized by a postposed auxiliary *no* if X has Sentence or Adjective or Verb, which is to be embedded. It is to be discussed that, before he acquired the rule, the child used this negative pattern analytically while he began to use verbal and adjectival inflections synthetically via the suffix *nai*. Besides, his performance with *chigau* in the pattern shows pragmatic development prior to syntactic or synthetic development of negative expressions.

2. Previous Studies on the Acquisition of Japanese Negatives

Unlike English negatives such as *no* and *not*, Japanese negatives are diverse in lexicon and usage. Since the 1960s, how children acquire them has been extensively studied as one of the indices of semantic and syntactic development. Of prominence is the acquisition of *nai*, which works as an adjective on its own to mean nonexistence and as a bound morpheme or inflectional suffix. According to Clancy (1985), Ito (1990), McNeill and McNeill (1973), Murata (1968, 1984), and Okubo (1967, 1984), the use of *nai* is generally acquired by the fourth year of age in the following procedure. Firstly, *nai* alone appears to mean rejection, prohibition, and disappearance. Secondly, *nai* starts to mean disappearance, nonexistence,